
ゼロの軍隊

にゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの軍隊

【コード】

N1097BA

【作者名】

にゃん

【あらすじ】

n番煎じの二次創作です お気を悪くしない程度に楽しんでください

始（前書き）

気に入らなければ最初からやり直しが続くかもしれない

始

世の中には一人殺せば殺人者 百人殺せば英雄という言葉がある

軍人である自分にとって救いの言葉だ

悲しいがそれでも自分が人殺しから英雄に変わるのが有難い

銃が人を殺すのではない 人が人を殺すのだ

では 国が、世界が 銃を向けるのなら 人はどうすればいい？

時は第三次世界大戦

世捨て人にとって格好の墓場だ

自分は知った 生きているのではなく生かされていると

ソラを夢とするなら

地は絶対なのだろう

縛られ続ける重力には逆らえない

誰もが終戦を望みながら死地に赴き失意の中散っていった

「知っていますか？隊長。この先のバミューダ海域は不思議な事が

起きるらしいですよ」

ニミッツ級航空母艦 バラク・オバマの上で最後の雑談をしている
「知っている！だからこそ進むのだ。この辺りの連中ならあそこには近づかんからな。それよりもふざける前にマニュアルは読んだか？ルイス」

「大丈夫ですよ。何年パイロットやってると思っっているんですか？隊長。」

「そうだったな。老けたもんだ俺も、」

「隊長？」

ルイス side

「、、、どうしたんだ？隊長。」

静かだ 作戦前だからってこの静けさはある得ない

何よりカタパルトへ向かう機が一機も無いなど職務怠慢もいとこだ

ここは一度降りて確認をしなければ

「おい！..!どうなって、、、、」

どうなっているんだ？

誘導員も 機体検査員も居ない ましてや徐々に艦が沈み始めていた 揺れも酷く立っていられるほどではない

「、、、これがバミューダ海域！」

甲板に頭をぶつけてしまい 脳震盪を起こしたようだ

「、、、どうなってんだ！クソ、、、」

後は覚えてない 頭が働いていなかったから

目が覚めて 一人の少女に

「あら？起きたの？使い魔何だからしっかりしなさいよね。使えない使い魔」

D e a r m o t h e r a n d f a t h e r

どうしてこうなった

始（後書き）

まだまだおわらないぞお

裏・始（前書き）

腹痛い

裏・始

2年生への進級と使い魔召喚

魔法の成功率ゼロ

私にも出来るだろうか

ツエルプストーに昨日 あんな見栄を張らなければここまで緊張する事もなかったかもしれない

後の祭りだけど、、

やるしかない！！

「世界の果ての何処かに居る私の僕よ！」
後は勘で唱えてしまった

ポウン！！

ルイズside

またこうなった 何故いつも失敗しちゃうんだろ

土埃がひどい

? あれ?

out

ガラガラと音を発て巨大な 何か が学院に入ってくる

皆呆然とその光景を見ていると一人の人間が上から落ちてきた

「あれって、、、平民?」

「平民を召喚したの?」

ガヤガヤと騒ぎ始める

「、、、ふむ。どうやら、あの平民以外生き物は居ないようですね」

「そんな!先生やり直しをさせて下さい!」

「なりません。この儀式は神聖なもの。やり直すなど認められません」

「そんな、、、」

ルイズside

どうなってるのよ、、、

平民を召喚しちゃうなんて、、、最悪だわ

おまけに気絶してるし 恥ずかしい、、、

「何よこれ」

変な被り物のせいで儀式が進められないじゃない

o u t

「どうかしましたかな？ミスヴァリエール」

「何でもありません。大丈夫です」

儀式が終了したことを見届けるとコルベールは学院に戻るよう指示
した

裏・始（後書き）

あきらめんなよ!..!

始動（前書き）

風邪かもしれない

始動

ルイス side

なんだ？この女の子は？

戦争は？艦は？戦闘機は？隊長は？

頭の中を色々な事が右往左往する

「ああそこの君。 此処は何処かな？」

女の子は口をパクパクさせて何か言ってるようだがまったく聞き覚えが無い言語だった

「君は何人だ？何の目的で自分を此処につれてきた？金か？人質目的でか？どうなんだ？」

伝わらない事はわかっていても言わずにはいられない それほどまでに鬼気迫る思いでやっている

すると女の子は一本の木の棒を持つと何かを囁きこちらに向けた

out

ルイス side

口封じの呪文は失敗 サモン・サーヴァントも失敗 良いこと無いわ

「おのれ！小娘め！殺す気でいるならばこちらにも手があるぞ！！」

え？ 言葉が解る、、、

「わかる、、、わかるわ、、、」

o u t

「む？なんだ言葉が通じるじゃないか。しかし、木の棒一本で爆発を引き起こすとはさすがだ。致命的な外傷は見当たらないが、、、粉塵爆発の類いか？いや、しか「うるさいわ」

「む、、、」

「あんた名前は？」

「、、、ルイス。ルイス・ケネディだ。ここが何処か、何故ここに連れてこられたか教えてもらおうか」

「ここはハルケギニア大陸のトリステイン王国。そしてあんたはサモン・サーヴァントで召喚された使い魔よ」

「、、、ふ。ハハハハ。お嬢ちゃん。今はエイプリルフルじゃないんだよ？」

「エイプリル？なんだか知らないけど、左手を見なさい。契約の証があるでしょ？後、お嬢ちゃんなんて呼び方許さないわ」

「、、、じゃあ何て呼べば良いのかな？」

左手を確認しながら尋ねる

「ルイズ。ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールよ」

「ほお。奇遇だね。ルイズとルイズか」

「一緒にしないで！あんたみたいな平民なんかと一緒にされたくないわ！」

「、、、軍人である自分にたかが平民と、、、」

「そうよ」

ルイズはやれやれといった風にため息を吐く

「だいたいなんで私の使い魔が平民なのよ！ドラゴンとかグリフォ
ンとかもっとかっこいいのがよかったのに！」

ルイズはそんな事を本人前で愚痴る少女を無視し、部屋を出た

始動（後書き）

らっせーろ

始動す(前書き)

暇だなあ

始動す

ルイス side

何の宗教団体か知らないが戦時中に人拐いなど録なものではないことくらい明白だ

「無線、は置いてきてしまったか、、、おっと」

「ウフフ。私、スフレを作るのが得意なんですのよ」

「それは是非食べてみたいな」

「え！それは本当ですか？」

「勿論だとも。君の瞳に嘘はつかないよ」

「ギーシュ様あ」

「君への想いに裏表など有りはしない」

クソ！ なんてもものを見せつけるんだ！

ここは見えないようにゆっくりと、、、

「ん？、、ルイズが呼び出した平民じゃないか」

「今日の儀式で呼び出されたという平民。1年生の間でも話題でし

たわ

「彼が呼び出された時から気絶していたものだから僕らは大変だったんだ」

早く逃げなければいかん

「待ちたまえ」

、、、、はあ

「なんでしよう?」

「平民が貴族の手を煩わせておいて、礼の一つも無いのかい?」

嫌な性格だな　しかし、義には義を尽くさねば

「その節は迷惑をかけた。有り難う。では、自分は急いでいるのでこの辺で。本当に有り難う。」

階段を何者かが駆けていく音が聞こえる

「む！いかん。急がねば」

後方から　忙しない男だと言われながらも走る

帰る足を見つけられさえすればなんとかなる！

始動す(後書き)

イワナ見習ってミケロ

裏・始動す

ルイズside

「あれ？アイツは？逃げられた？使い魔に？嘘でしょ？」

あり得ないわ！ま、まずは服を着て追いかけなきゃ！

何よ！何よ！踏んだり蹴ったりじゃない 平民のくせに平民のくせに！！

「えっと、、アイツは」

階段しかないわね
待ってなさい！

「ハアハアハア」

「ルイズ。今君の使い魔が」

ギーシュか、、ギーシュも手伝わせよう

「捕まえて」

「え？」

「逃げ出したのよ」

「契約した使い魔がかい？さすがルイズの使い魔だけあって常識外れだ」

「感心してないで手伝って!!」

「仕方ない」

よし！ 学院から逃げ出す前に捕まえなくちゃ

始動する

ルイス side

「ハアハア」

意外と広いなこの建物はどうなっているんだ！

「こうして君と二人きりになれるなんて夢みたいだ。微熱のキュルケ」

「今夜は微熱じゃすまなそう」

またやってるのか、、、 男臭い地獄のような場所での生活だったからか、、、ぐっ！ 欲しがりません勝つまでは！

「よし！出口だ！」

「あら？」

「アイツ確かゼロのルイズの、、、」

「ええ。平民の使い魔だわ、、、」

無視だ無視

ここを出たら晴れて自由に

out

「ああ！あそこよー！」

「あー！」

「ねえ。あなた達何やってるの？」

「いや、それが聞いてくれよ」

「いいから！逃げられちゃうわ！」

「おっと」

少しの問答でさえも許されないそういった状況 のはずだがギーシ
ユ自身にはさしたる問題でないことが緊迫感を消し去ってしまう

「よっと」

出口をでて退路を確認し、自分のこれからを考えながらどうしよう
か悶々していた

「魔法だかなんだか知らないが オワツー！！」

身体が浮く という現象は結果だけ見れば簡単かもしれないが
これはどうだろうか

「凄い！身体が浮いているぞ！、、、、！！！！！」

ルイスはパイロットだ。空を飛ぶのが仕事だ。夜の空だって例外で

はない

「勘弁してほしいな。君を浮かせるのはこれが二回目だ」

明らかにイタズラをされているが慣れたものをやられても大して気にしなくなるのが人間だ。さらにルイス自身は空の上の非常識に目を奪われていてそれどころではなかった

「主人から逃げ出す使い魔だなんて。可笑しすぎ」

ケラケラ笑うツェルプストー

使い魔を見つめるルイズ

魔法で浮かせるギーシュ

二つの月を食い入るように見るルイス

物語の始まりとは常に唐突であると後にルイスは語る

人物紹介

といっても紹介するものなんて少ないけど

ルイス・ケネディ

22歳の愛煙家でF-16を愛機としていた

アメリカ出身

金髪碧眼 顔立ちも整ってはいるが、戦時中である事と軍人である事が彼を童貞ライフへと誘う

髪の毛を長髪にする等、軍人としては中途半端なところがあるため階級を隊長から取り上げられ口外する事を禁じたため階級は無いに等しい

アメリカ合衆国空軍に配属されている

ニミッツ級航空母艦 バラク・オバマに着艦していた際バミューダ海域へ進むとまったく違う世界に辿り着く

乗組員の安否が気になる

ハルケギニアに辿り着いたのはニミッツ級航空母艦と搭載機 そし

てルイス一人

人物紹介（後書き）

まだまだ続くんじゃよ

始動するル

「ちきゅう？」

「そう。地球のアメリカで軍人やってたの。さらに、月が一個しかない世界」

「信じられない」

バツサリと言われる

「そんな別世界があるだなんて」

「それはこちらとしても同じだ！とにかくだ。今すぐ元の場所へ返してほしい」

「無理」

バツサリと「y

「、、、はあ」

「相手が何処の誰だろうと契約は絶対なの」

ポイポイと着ていた服を脱ぎこちらに投げつける

「な、何をしている！」

「寝るから着替えるのよ」

パチンと指を鳴らすと部屋の明かりが消える 便利な時代になった
ものだ。ルイスはまじまじと蝋燭を見つめた

そして振り返ると少女の生着替えに心奪われた

「、、、君は露出癖があるのか？」

「なんで？」

「いや、男に見られると興奮するのかと、、、」

「男？あんたは只の使い魔でしょうが、、、じゃ、それ洗濯しとい
てね」

ルイスの男が譲ってわいけないと騒ぎ立てる

「わーい。これからルイズちゃんの生着替え見放題だ。いやあ得し
たなあ」

人間どこまで堕ちればここまで変態の眼になれるだろうか

「くっ、、、」

さすがのルイズもこれには耐えられなかった

「ルイズちゃんのパンツゲットだぜ！！」

部屋から追い出された

「逃げ出すなんて帰る手段が無い以上無駄か、、ヤバイぞニコチンが切れてきた」

それからしばらくして機内に置き去りだった煙草を吹かしながらF-16を点検していた

「君。ミスヴァリエールの使い魔くん、だったね？」

「ええ。そのようです」

吸い殻を甲板に落とし、踏み潰す

「いやあ実は、この不思議な形の物が気になってねえ。あ、私はコルベールと言います」

「自分はルイス・ケネディです。さすが、お目が高い」

「と、言つと？」

「コイツはF-16 ファイティングファルコン。空を翔る鷹。自分の愛機です」

「ま、まさかとは思いますが。これが飛ぶ、とか？」

「ええ。勿論。そうでなきゃ意味がありません」

「ここにあるのも全部？」

「勿論」

「ぜ、是非とも飛んでいるところが見たい！」

この世界に来て本当に来て良かったと思える瞬間であった

「ええ！ええ！勿論です！飛んでいるところを見せますとも！」

……

しばし時間を挟み

「いやあ教師をされていて本当によかったなあ」

みなさんは戦闘機のエンジン音を知っているだろうか？

始動するルイ

真夜中に戦闘機を飛ばして怒られないのは戦時中だったから

生徒が寝静まる真夜中に戦闘機を起動させた男は付近にいた教師と一緒に学院長室へと連行された

「君は確かミスヴァリエールの使い魔だったね？」

「はい」

「何故、夜中にあんな音を発っていたのかね？」

「全て自分の不注意が生んだ結果です」

「いえ。彼に動かせと言ったのは私です」

「コルベール君」

「はい」

「給料は減給で文句は？」

「ありません」

「そうか。そうか。では、使い魔君。君にも罰を与えるぞ？」

「はい」

「虚無の日の日が出てから以外の使用はワシの許可を得ること。」

「了解した。では、失礼しました」

内心罰でもないだとツツコミつつ退室する

「コルベール君。言いたいことはわかっているな？」

「はい。あれは確かに竜の羽衣でした」

「間違いないだろう」

「あれ以外にも十体以上の竜の羽衣がありました。そして、何より彼のルーンですが、、ガンダールヴと一致しました」

「ヴァリエール家の三女がのう、、、、」

ところ変わって

「使い魔としてまったく使えないわね」

「面目ない」

「このまま食堂へ連れていくのは恥ずかしいわね」

わざと問いかけるように話しかける

「グググ」

しかし、食事のためと割りきる

「いえ、やめたわ。昨日の事もあるし、自分採ってきなさい」

「、、、はあ」

貴族はいいなあとしくづく感じた日だった。

始動するルイス

軍用レーション

日本のは上手いらしいとよく話していた実際食い慣れると新食感だつたりと新しい物が欲しくなる。

まあ、軍人でさらに補給も来ない身としては我儘など許されないだろう。

「一人で食う飯がこんなに不味いなんてな。思わなかったぜ隊長」

色褪せる事の無い出来事が思い出される。こうしている間にも仲間はずきつと戦っている。後ろめたい気分だ
逃げ出したことを喜んだんだろう

「軍人、、、か」

甲板に出てみると田舎を彷彿とさせる緑溢れる景色に出会う

「逃げちゃ駄目だとわかってるのにな」

煙草を投げ捨て降りていく 艦内は静けさのあまり鉄の壁は余計冷たく感じた

「どつすりゃいい？隊長」

返ってこない返事を当てにしようとしている

「依存、、、してたんだな」

あれは何時のことだったか 軍に配属され、隊長に出会った時

・
・
・

「本日より配属されたルイス・ケネディ上等空兵であります」

「、、俺がここの隊長のモリガン少尉だ。よろしくな坊主」

にこやかに笑う少尉は珍しく。さらに、誰もが 新米なんぞに構うか と考えていたらしかった

「モリガン少尉。何故、自分には優しいのですか？」

思い切って聞いてみた 周りにも聞くよう説得されたからでもあるが、自身の疑問でもあったからだった

「、、昔、坊主みてえな息子がいてな。まあ、とっくの昔にくたばつちまつたけどよ。坊主、おめえは死なんってくれよ、、なんてな」

初耳だった。昔話をあまり好む人ではなかったから こうして話しかけられた事こそこの話の信憑性だろうと考えた

「この歳ではまだ死ねませんよ。モリガン少尉」

「その呼び方やめねえか？できりゃあ親父でもいいぞ？」

煙草をくわえた姿は夕日によく映えていた

「大事な時にまで残しておきます」

・

・
以降自分はモリガン少尉を隊長と呼び続けている 親父と呼ぶ日は
決めていた

終戦を酒を交わしながら 親父と 戦友と
考えに耽っていると貴族の嬢ちゃんがこちらに走って来ているのが
見えた

「すまない。遅れたみたいだ」

愛想笑いで気分を変えようとすると

「あんた、臭いわ」

理解と和解の道は険しい

貴族の貴族による貴族のための政治主体

最悪だわ 召喚したばかりの使い魔が学院長に呼び出されるなんて聞いたこと無いわ

だけど、食事は静かだしよかったわ、、、大丈夫よね。使い魔に餌をやらない主人なんて 後でちゃんと餌をやらなきゃ駄目ね 仕方ないけど

「、、、はあ」

どうして私がこんなに疲れなきゃいけないのよ

、、、どこよアイツ もう！せっかく私が探してあげているのに！！

「あっ！」

向こうからトボトボと浮かない顔をしながら歩いてくるのが見える やっぱり何も食べてないのね きつと 仕方ないから一緒に料理長のところから余り物をいただいできましよう！

「、、、臭い」

使い魔から漂う煙の臭い、、、最悪だわ

「ああすまない。先ほど煙草を一本いただいでいて」

「たばこ？」

何にせよ臭いのは耐えられないわ

「たばこは禁止よ」

「そ、そんな！それなら「命令よ！」

何がそこまで良いのか知らないけど 平民の使い魔でさらに臭いなんて許さないわ

平民の使い魔ってだけでも譲歩してあげているのに！！

「ミスヴァリエール。あれは何の集まりだ？、ですか？」

あら？口の聞き方が分かってきたようで嬉しいわ

「今日は2年生の授業はお休み。召喚したばかりの使い魔とコミュニケーションを取るのよ」

「な、なるほど」

あからさまに嫌そうな顔するのやめてほしいわ 私だって嫌なのに

「あら？」

うげ、ツエルプストー、

「これは赤く、ゴツゴツしていて、、解らん」

「あなた、サラマンダーを見るのは初めて？」

「野ざらしで大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。契約を交わした使い魔は主人に絶対忠実、逃げたりなんてしないし、ねえ？フレイム？」

私に対しての悪口だって分かるように言ってるわね！

「余計なお世話よ！」

「まあ、平民の使い魔なんてゼロのルイズにはお似合いよね。オ
ーホッホッホ」

私だってこんなのを召喚したかった訳じゃないのに！

「なんなの！あの女！、突っ立ってないでお茶くらい持ってきて
！！」

ホントに使えない使い魔！

外形より中身よね（貴族に限る）

相手が貴族だとしても開口一番 臭いはひどい

「あら？」

誰だと思い振り返ると黒人と思われる女性と 紅い体 ゴツゴツした岩石を彷彿とさせる体格 そして尻尾の炎

ポケモン？ヒトゲか？ いやいや、こんなにのっぺりしてなかった もっとかわいい筈

「あなた、サラマンダーを見るのは初めて？」

当たり前だ こんなのが現代にいたら真っ先に絶滅危惧種だ

何やらあの女性とミスヴァリエールが喧嘩をし始めたな 喧嘩するほど仲がいいと言つが例外もあるもんだ

「突っ立ってないでお茶くらい持ってきて!!」

いつから自分は給仕になつたんだ

しかし、お茶をどこでもらえば良いか聞いていない
ミスヴァリエールを探さなければ

「おっと」

ドン っと誰かとぶつかったようだ

「すまな「すみません。すみません」

、、、どうやら貴族様に運んでいたものを落としてしまったらしい
その女給は必死で謝っている 直接的な原因は自分にあるので謝
ろうとすると

パシッ

「僕のヴェルダンデイに何て事をするんだ！」

使い魔にケーキを落としたり叩くかよ普通 その使い魔は落ちたケ
ーキ食ってるし

「待ってくれ、、ください」

彼女だけに非があるわけじゃない

「また君か」

見れば昨日のスフレの少年だった

「君は厄介事を起こすのが好きなようだね」

「いえ、運がないだけです。しかし、あなたは運があるようです
ね。女運が」

昨日の今日でまた違う女を侍らせている事をつつくと 明らかに態
度が変わった

「な、何を言っているんだ君は！か、彼女に要らぬ誤解を生むだろ

う！」

良いぞ良いぞ 女を叩いた罰だ 甘んじて受けるがいい

「昨日はスフレが得意なお嬢さんで今日は何が得意なお嬢さんかな？」

「どういう事？ギーシュ！」

「ギーシュ様？」

良いタイミングだ 図ったかのようなこのタイミング、策士か？

……結果

「君のせいで二人の女性を泣かしてしまった！！」

「ふざけるな。ミスターギーシュ。君の浮気性が災いしたのだ」

「どうやら君は貴族への礼儀を知らないようだ」

「残念ながら中流階級しかない世界から来たもんでね。それよりいいのかい？今ならまだ許してくれるかもしれないぞ？」

「平民の分際で、、決闘だ！」

軍人が軍人であるために

「決闘？」

「そうだ！ヴェストリの広場で待っている！」

スタスタと歩き去る少年を見送ると横から

「あんた！何やつ点のよ！」

と怒られた

「な、何だ？」

「何だじゃないわ。何勝手に決闘の約束なんてしてんのよ！」

「どこへ行くのだ？」

「ギーシュのところよ。今ならまだ許してくれるかもしれない」

歩みを止め 少女に言う

「御免だな」

「え？」

「貴族に生まれたら一生貴族なら、男に生まれた自分は一生男だ。自分にもプライドがある」

「あんだ。何も分かってない！平民は貴族には勝てないの！怪我で済めば良い方なんだから」

少女は止めるが男は聞かなかった

「その君。ヴェストリの広場なる場所はどこだ？」

「ああ。あっちだあっち」

「マリコルヌ！」

「礼を言う」

さっさと走って行ってしまった

「これは見物だねえ」

周りも野次馬となって見物しに行く

「もう！使い魔のくせに勝手な事ばかりするんだから！」

……

あっという間に人だかりができ、その中心に二人の男が居た

一人はマントを羽織り、杖を持った少年

もう一人は軍服を着て、右手に拳銃 左手にコンバットナイフを持った青年

「逃げずに来たことは誉めてやるっ」

「逃げる理由がないからな」

「待って！」

二人の間を割っては入るように来た少女は決闘を止めさせるためにきたが茶化され青年にとって退けない理由を作った

「君が何を言おうと決闘は始まっているんだ！」

少年の持っていた薔薇の花びらが一枚地面に落ちると、一体の鎧を造り出した

「僕は青銅のギーシュ。よって青銅のゴーレム バルクューレがお相手する」

ゴーレムは地面に立つと何の予備動作も無しに腹部を殴り付けた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1097ba/>

ゼロの軍隊

2012年1月4日14時46分発行